

美術の窓

5

May
2025
No.500

THE WINDOW OF ARTS

全国13大学 卒展レポート

東京藝術大学
武蔵野美術大学
多摩美術大学
女子美術大学
東京工芸大学
東北芸術工科大学
金沢美術工芸大学
愛知県立芸術大学
名古屋芸術大学
京都市立芸術大学
京都芸術大学
広島市立大学
崇城大学

354

名
一挙紹介

NEW 新人大図鑑 2025

インタビュー
平野啓一郎
他者の存在を描さざる芸術
木津文哉
画家として生きる

技法講座

揉紙を古画に見立てて描く洒脱な日本画表現(中編) 山浦めぐみ

公募展便り 白日会展・日本南画院展・独立春季新人選抜展



高村大瑠「黄昏時」

日本画・学部



清田真鈴「侵食する××」

洋画・学部



竹田由加里「Classique」

洋画・学部



磯野真希「寂光」

日本画・学部



猿渡果凜「Omnibus」

日本画・学部



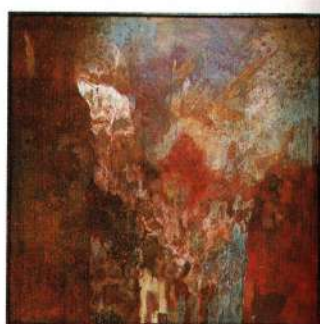
藤本美空「Bright Out」

彫刻・修士



中山萌愛「心躍る」

彫刻・修士



大濱華純「徒し世」

日本画・学部

●木陰の明暗のコントラストが効いています。竹田由加里さんはレストランで食事をする人物の情景ですが、構図の切り取り方が独特ですね。画面奥のキッチンのスタッフやグラスなどの描写によって、臨場感のある作品に仕上がっています。

●清田真鈴さんは錆びついた公園の遊具、雨に濡れたアスファルトなどの描写の一つ一つの質が高い。リアルに描かれているからこそ、その光景に「侵食」してくる得体の知れない存在の異質さがより一層際立って見えます。高村大瑠さんの人物と花の組作品は、静寂の中で花を手向けるような敬虔さが感じられました。

●季節を慈しむように描かれた花々は過ぎゆく時間の尊さを想起させます。磯野真希さんはイカの吸盤や衣服のレースを胡粉で盛り上げて表現したり、箔の表情に変化をつけたら、細部にわたってこだわりが窺えました。猿渡果凜さんは自身が創作した物語を絵画化した作品。様々な時代や文化の要素が混ざり合いながら、独自の世界観を構築しています。大濱華純さんは犬の身体を覆い尽くすように、複雑に色が積み重なった絵肌が目を引きました。

●何かが蠢いて次の瞬間には飲み込んでしまふような、強い波動を感じます。中山萌愛さんはゆるやかなS字を描く姿勢を丹念にモデリングしていて、暗れやかな表情も印象的です。藤本美空さんは表面がなめらかに仕上げられた洗練された造形で、完成度が高い作品だと思いました。彫刻コースは今回が最後の卒業・修了制作展。その場にふさわしい力作だったと思います。

Information

創立年：1949年
2024年度学部卒業生数：56人
2024年度大学院修了生数：10人(修士課程のみ)
アート系学部・学科：
【学部】芸術学部 美術学科(日本画、洋画、彫刻)、デザイン学科(プロダクトデザイン、グラフィックデザイン、マンガ表現) ※現在は美術学科のコースの再編に伴い、日本画コース、洋画コース、3Dアートコース、アート・イラストレーションコースが設置されています。
【大学院】芸術研究科(美術、デザイン、[博士後期課程] 芸術学)
【住所】熊本県熊本市西区池田4-22-1

崇城大学

崇城大学第22回芸術学部卒業展・第20回大学院芸術研究科修了展
[SOJO UNIVERSITY STUDENT EXHIBITION 2025]
会期 ●2月18日～2月24日 会場 ●熊本県立美術館 分館



坂西涼羽「商店街」

洋画・学部



川路桐耶「sink」

洋画・修士



糸数日呼「はんぶんこ」

洋画・修士



三城美佐樹「龍の鱗」

洋画・学部

杉本泰三「あなたの姿が離れて」

洋画・学部



田中凈人「街と私」

洋画・学部

●糸数日呼さんは細かい筆触で様々な色を上手く扱いながら、日常のワンシーンのようなあたたかみのある画面を作り上げています。特にテーブルの映り込みやスポットライトに照らされる壁面の明るい部分など、光の表情とそれがもたらす効果をよく捉えているのが印象的です。川路桐耶さんは頭部のない人物、傍らに立つ猫耳のキャラクターと、台所のシンクという取り合わせ。日常と非日常がクロスする世界観で面白いですね。「ああああ」の文字はニコニコ動画などの配信画面上に表示されるコメントのようでもある。

●心の叫びでしょうか。シンクで光るスマートフォンが存在も暗示的です。坂西涼羽さんの作品は寂れた商店街を奥行きのある構図で描いている。軒先のシャッターや自転車など生活感のあるモチーフに対して、線画のみで着彩されていないキャラクターの存在感が際立ちますね。田中凈人さんは重厚なマチエールで心象風景のようにセピア色の街の姿を描いています。

●どこまでも密集した建物が連なるような遠景は圧迫感を感じさせるようです。未来に対して漠然と積み上がっている不安のイメージも孕んでいるように思われます。三城美佐樹さんの作品は熊本阿蘇市の龍鱗がモチーフでしょうか。木々を映し出し、日の光を浴びた水面が黄金色に輝く情景は非常にドラマチックです。青い空と緑が心地よく、自然の安らぎが感じられました。杉本泰三さんは大まかにフォルムを捉えながら、細やかなタッチを重ねて緑豊かな野原と木々の風景を描いています。



中村妃菜

なかむら・ひな 1995年熊本県生まれ。崇城大学大学院芸術研究科美術専攻修士課程修了。日春会准会員。第7回・第8回新日春展新日春賞。①佐藤和歌子。②映画：「千と千尋の神隠し」、音楽：久石譲、アニメ：「電脳コイル」。



「往昔」
2024年
岩絵具、麻紙
50号S

ノスタルジーを醸し出す情景

〈作家コメント〉 今は朽ち果てて誰も住んでいない家屋。本来の役目を終えて佇む廃墟。近付いて中を覗くと、そこはいろんな生き物達の棲家となっていた。その気配や息遣いはどこか懐かしさを含んだ空気感に満ちていて、そんな情景に惹かれて描いている。